

国史跡美濃金山城跡発掘調査概報

I

2018

可児市教育委員会

滋賀県立大学

国史跡美濃金山城跡発掘調査概報

I

2018

可児市教育委員会

滋賀県立大学

例 言

1. 本書は可児市教育委員会、滋賀県立大学が平成 29 年度に実施した可児市兼山宇古城山に所在する国指定史跡 美濃金山城跡の発掘調査報告書である。
2. 調査期間及び調査担当は下記のとおりである。
第 6 次調査 平成 29 年 9 月 4 日～10 月 27 日 中井均（滋賀県立大学人間文化学部）
長江真和・長沼毅（可児市教育委員会）
3. 調査参加者は下記のとおりである。
戸田龍蔵、杉山佳奈、西澤光希、河本愛輝、SAI BEN JIA、齊藤秀香、遠藤あゆむ、井内南奈香、岩崎心人、佐藤佑樹、柴田慎平、高瀬裕太、三木将弘、河合さくら、伊東涼太、松原草太（以上滋賀県立大学学生）、黒田祐規子、多和田伴子、西田まゆみ、萩原さちこ、堀木彰、本田博志、武藤淳司（以上可児市教育委員会）
4. 本書は分担して執筆し、執筆者名は文末に記した。編集は長江、長沼、中井、佐藤、柴田が行った。
5. 遺物の図面及び写真は、口縁部や底部など土器の特徴がわかるものを選別して掲載し、小破片は掲載していない。
6. 出土遺物について下記の各氏にご教示いただいた。
瀬戸美濃産陶器 藤澤良祐（愛知学院大学）
土師器皿 井川祥子・内堀信雄（岐阜市教育委員会）
磁器 鈴木正貴（愛知県埋蔵文化財センター）
貝類 黒住耐二（千葉県立中央博物館）
7. 現地調査の過程で下記の方々に多大なるご指導とご協力を賜った。
伊藤航貴、小澤一弘、小野友記子、加藤理文、小谷徳彦、小林晃太郎、島田章広、下高大輔、杉本和江、杉本圭祐、谷口哲也、田ノ下雄二、濱野浩美、松井一明、丸山組、溝口彰啓、美濃金山城跡おまもりたい、吉田実華（五十音順・敬称略）
8. 本書に掲載した出土遺物、図面、写真は、すべて可児市教育委員会で保管している。

本文目次

例言

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 地理的概要と美濃金山城跡の歴史	3
第1節 地理的概要	3
第2節 美濃金山城跡の歴史	3
第3章 調査成果	5
第1節 I区	5
第2節 II区	10
第3節 表採遺物	13
第4章 まとめ	16
第1節 遺物について	16
第2節 遺構と年代観について	16
第3節 まとめ	17
付論 第6次調査出土具類遺体について	19

図版目次

図1 主郭平面図	2
図2 I区平面図	6
図3 a-a'土層図	7
図4 b-b'立面図	7
図5 c-c'立面・土層図	8
図6 d-d'土層図	8
図7 e-e'土層図	8
図8 I区出土遺物	9
図9 II区平面図	11
図10 f-f'土層図	12
図11 g-g'土層図	12
図12 h-h'土層図	12
図13 i-i'土層図	12
図14 j-j'土層図	12
図15 II区出土遺物	14
図16 表採遺物	15
図17 出土具類遺体	21

表目次

表1 美濃金山城跡関連略年表	4
表2 II区出土遺物観察表	15

写真図版目次

図版1 I区1	22
図版2 I区2	23
図版3 II区1	24
図版4 II区2	25
図版5 II区3	26
図版6 I区・II区出土遺物1	27
図版7 II区出土遺物2	28
図版8 II区出土遺物3・表採遺物	29

本文目次

例言

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 地理的概要と美濃金山城跡の歴史	3
第1節 地理的概要	3
第2節 美濃金山城跡の歴史	3
第3章 調査成果	5
第1節 I区	5
第2節 II区	10
第3節 表採遺物	13
第4章 まとめ	16
第1節 遺物について	16
第2節 遺構と年代観について	16
第3節 まとめ	17
付論 第6次調査出土具類遺体について	19

図版目次

図1 主郭平面図	2
図2 I区平面図	6
図3 a-a'土層図	7
図4 b-b'立面図	7
図5 c-c'立面・土層図	8
図6 d-d'土層図	8
図7 e-e'土層図	8
図8 I区出土遺物	9
図9 II区平面図	11
図10 f-f'土層図	12
図11 g-g'土層図	12
図12 h-h'土層図	12
図13 i-i'土層図	12
図14 j-j'土層図	12
図15 II区出土遺物	14
図16 表採遺物	15
図17 出土具類遺体	21

表目次

表1 美濃金山城跡関連略年表	4
表2 II区出土遺物観察表	15

写真図版目次

図版1 I区1	22
図版2 I区2	23
図版3 II区1	24
図版4 II区2	25
図版5 II区3	26
図版6 I区・II区出土遺物1	27
図版7 II区出土遺物2	28
図版8 II区出土遺物3・表採遺物	29

第1章 調査にいたる経緯と経過

美濃金山城跡は、国史跡指定を目指すため、平成18～22年度までの5次にわたる調査の中で遺跡の内容及び範囲確認を行い、平成25年度に国史跡となった。

平成27、28年度に保存活用計画書を策定した後、整備基本計画を策定するにあたり、各曲輪の構成要素で不明な部分があった。美濃金山城跡整備委員会、岐阜県や文化庁と協議を行い、過去の5次にわたる調査の中で未調査の部分を対象に各曲輪2～3年をかけて調査を行い、各曲輪の構成要素を明らかとすることとなった。

主郭は昭和29年から建物があり、天守と想定される部分が未調査であった。聞きとりによれば、建物は建てた際に東にある坊主山から土を持ち込み、もともと主郭にあった川原石の礎石を用いているため、天守想定部分には改変が入っていることが予想された。平成29年度に、建物の撤去を行い、9月4日から10月27日まで主郭の調査を行った。調査は後世への保存を考慮し、部分的に行った。

調査は天守想定部分の南東部分をⅠ区、北西部分をⅡ区として設定した。

Ⅰ区では5本のトレンチを設定した。1・2トレンチは天守想定部分の構造や規模の解明を目的とした。1トレンチはL字に設定し、東側に石垣SV1、南側にSV2が確認された。層序は大きく分けると、上から礫層（上）、しまりの強い盛土、整地層、礫層（下）、地山面となる。地山面は整地され、黒色の掘り込みが検出された。この掘り込みは遺構の保存のため掘削を行わなかった。土層の堆積から三つの時期が想定された。また、2トレンチでは、礫層（下）がSV2の長さよりも短いことが確認された。

3トレンチは、1トレンチの成果を受け、内側の石垣角の確認を目的とした。角部分は比較的大型の石材を用いており、1トレンチと同様の整地層が見られた。

4トレンチは、検出された石垣の裏込めの確認を目的とし、裏込めは土と石が互層状になっていることが確認された。

5トレンチは、検出されたSV2の長さの確認を目的とした。SV2の長さは約15mであり、東側は3トレンチで見られるように3段確認されたが、西側は1段である。

Ⅱ区は北側と南側で石敷遺構（SX1、SX2）が確認された。SX2より西側ではBトレンチより、自然岩盤の上に整地を行い、礎石（SB1）を据えていることが分かった。SX2とSB1の面で遺物が面的に見られている。

AトレンチはSV3の裏込めの確認を目的とし、裏込めを入れていることが確認された。

（長江）

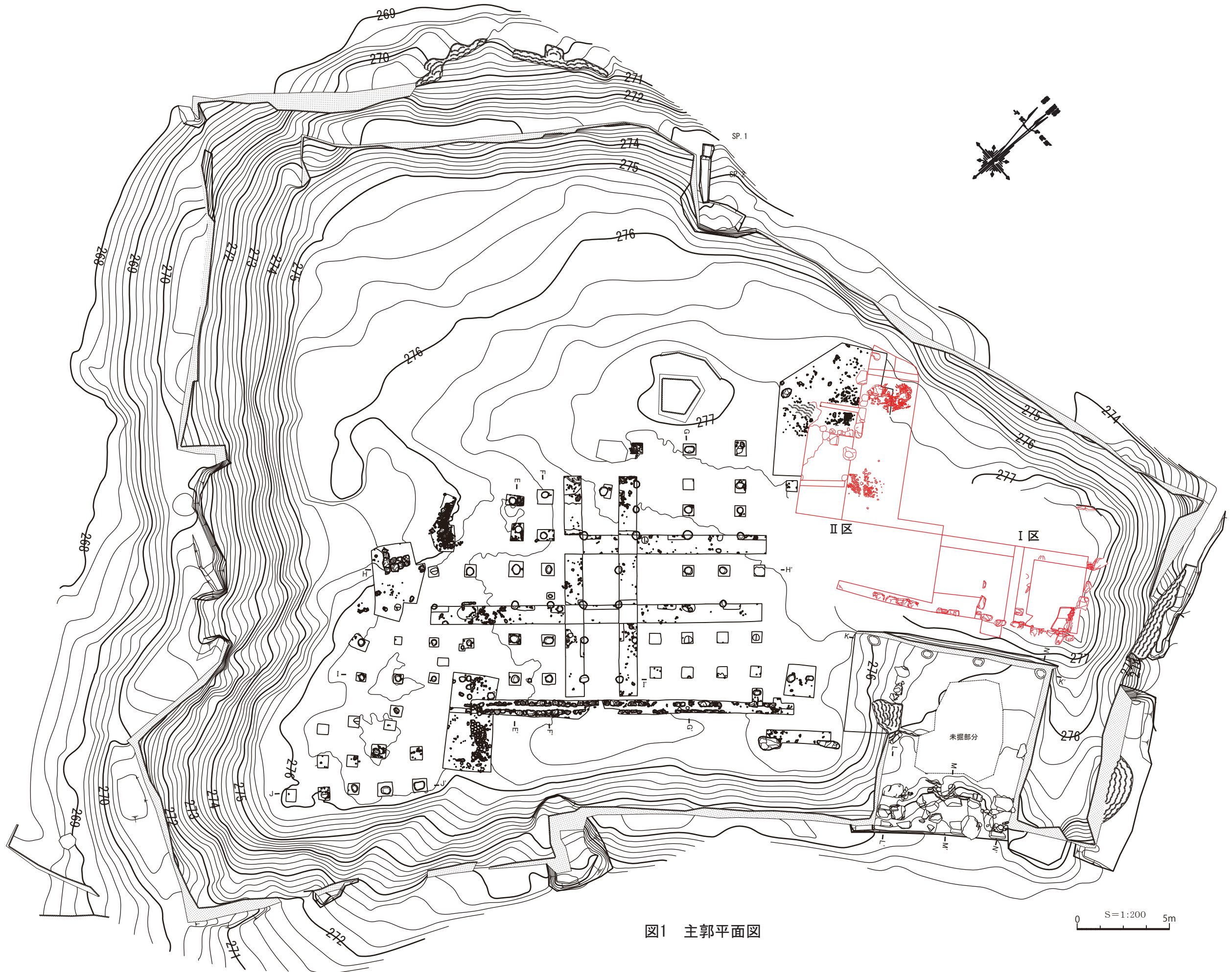


图1 主郭平面图

第2章 地理的概要と美濃金山城跡の歴史

第1節 地理的概要

可児市兼山は、岐阜県中南部、木曽川中流左岸に位置し、東は加茂郡八百津町伊岐津志、南及び西を可児郡御嵩町伏見、北は木曽川を隔て加茂郡八百津町和知と境をなしている。

美濃金山城跡が存在する字古城山は、兼山地区南側にあり、町場は南側丘陵地と北側を流れる木曽川に規制され、北東から南西方向に広がっている。町場は海拔約100m、城跡の山頂部は約276mの標高があり、東は坊主山、西は高根山に続く。その少し下流で飛騨川と合流する。

木曽川は、木曽の山や飛騨の山々から伐り出される木材の輸送路として早くから利用された。兼山より上流の錦織では、山から木材を管流して綱場を集め、筏に組んで木曽川を下った。応永29(1422)年頃には錦織湊に川関があったことが明らかとなっている。兼山にいつごろから湊があったか不明だが、天文8(1539)年の烏峰城主斎藤大納言画像(浄音寺所蔵)に記載された明叔慶彦の賛には、木曽川を行き交う舟と人々にぎわう街の様子が表現されている。また天正12(1584)年3月20日の小牧・長久手の戦いにおける池田恒興宛ての羽柴秀吉書状で、秀吉が出水時の渡河に備えるために犬山に舟を集めるように指示し、池田から美濃金山城主森長可に対して、兼山から犬山の船を集めるようにと指示しており、森の城下町に付属する兼山湊では、舟運が盛んであったことがうかがえる。

また城の南側には近世中山道が通る。近世地誌類では、天正10(1582)年における織田信長の甲州攻略で織田軍勢が岐阜から内田の渡し(犬山市)を経て土田(可児市)を通り、兼山に泊まったとされ、また文禄2(1593)年、佐竹義宣の家臣大和田重清が九州名護屋から水戸までの行程を記した『大和田近江重清日記』には、太田を渡って御嵩宿に行ったことが記されている。このように戦国期には街道が木曽川の内田か太田を渡し、兼山の南、御嵩へ向かうような中山道のルートに近似した道が存在しており、兼山周辺は河川・陸上交通の重要な場であったと考えられる。

(長沼)

第2節 美濃金山城跡の歴史

美濃金山城は『金山記全集大成』によると、天文6(1537)年に斎藤道三の養子である斎藤正義(妙春)により古城山山頂に築かれ、烏峰城と名付けられたとされている。正義は斎藤妙椿の系譜を継いで、可児・加茂地域を中心に権力を持ち、土岐氏の守護体制から自立した防衛の拠点として烏峰城を構えたと位置付けられる。正義は天文17(1548)年に久々利城において久々利氏の土岐悪五郎に討たれた。その後、城は斎藤家家臣の長井道利の支配下に置かれ、斎藤氏の領国の東端を担う重要拠点として使用された。

織田信長による美濃攻略後、永禄8(1565)年に森可成が烏峰城主を命ぜられた。その際に城の名を「金山城」に改称したといわれている。元亀元(1570)年志賀の陣において宇佐山城で可成が戦死し、次男の長可が跡を継いで金山城主となった。信長は天正10(1582)年2月、天目山の戦い後に武田旧領を家臣に分与し、長可は信濃国川中島四郡を与えられた。金山城は長可の弟、長定(乱丸)に与えられた。同年6月に本能寺の変が起こると長定は戦死した。越後にいた長可は撤退し、金山城に入城している。以降、長可は翌年までに金山城を足掛かりに東濃・中濃の抵抗勢力を一掃している。

天正12(1584)年、小牧・長久手の戦いにおいて長可が戦死し、弟の忠政が跡を継いで金山城主となり、本知7万石を与えられた。同13年には秀吉より羽柴・豊臣姓と桐紋の使用を許され、同15

年には従四位下に昇進し侍従となり、右近大夫と称したとされる。慶長5(1600)年に忠政が信濃国第川中島の海津城13万7500石に国替えとなったのに伴い、金山城は犬山城主石川貞清領となった。関ヶ原の戦い後の慶長6(1601)年には犬山城主小笠原吉次によって城は破却され、建物等は尾張犬山城へ引き取られたと伝えられる。金山はその後、尾張藩領となり、木曾川の川湊として栄えた。金山城が存在した古城山は尾張藩の御留山となり村人の入山は禁止された。

昭和42年には岐阜県史跡に指定されている。平成18年度から22年度にかけては、5回の発掘調査が行われ、瓦や建物礎石等が確認された。その後、平成25年に「美濃金山城跡」として国の史跡に指定された。

年号		事項
天文6	1537	斎藤大納言が烏峰城に入城。
永禄8	1565	織田信長から森可成に烏峰城が与えられる。金山城に改称。
元亀元	1570	宇佐山城の戦いで可成死去。長可が金山城主となる。
天正10	1582	長可が川中島に転封となり、弟の乱丸が城主となる。 6月本能寺の変で乱丸が死去し、長可が再び城主となる。
天正12	1584	小牧・長久手の戦いで長可死去。弟の忠政が城主となる。
慶長5	1600	忠政が川中島へ転封となり犬山城主石川光吉領となる。
慶長6	1601	犬山城主小笠原吉次により城が破却される。

表1 美濃金山城跡関連略年表

(齊藤)

第3章 調査成果

第1節 Ⅰ区(図2)

1 トレンチ及び2 トレンチの層序はほぼ共通し、後世に上に建てられた建物により地山面からの堆積土の厚さは東で1.1 m程度、西では0.5 m程度である。地山面である25層上面には黒色の埋土を有する土坑(SK1)が見られる。なお、この土坑は保存のために掘削を行わなかった。18層からは磁器やアカシ貝が出土しており、その上面の7及び17層は石垣(SV1・SV2)を築く際の整地層と考えられる。この整地層は3 トレンチ内で検出されたSV1、SV2の角でも確認されている。トレンチ内ではこの整地層より下からは瓦は出土しておらず、7及び17層より上から瓦が出土している。

その整地層の上の中央付近に斜めに硬く締まる造成土(4～6、8～11)が見られ、その上には礫層が見られる。ただ、その礫層は建物造成時に改変にあっており、2 トレンチでは一部しか確認されていない。トレンチの堆積状況より地山面、石垣を築いた整地面、石垣を埋めた礫層上面と三つの時期のあったことが明らかとなった。

SV1(図2・4)

SV1は南端でSV2に接続し、北端は調査区外に続き、現在確認できる全長は約4.7mである。根石となるような石は見られず、整地層の上に築かれる。曲輪の内側に面を持っており、主郭北東面の石垣に対応する。2～4段に石材が残存し、残存高は最高で約1mである。石材はチャートと凝灰質砂岩、変成岩が用いられている。石材は自然石ないし粗割石で幅0.2～1.0m程度と大きさは不規則であるが、石材は比較的横長に用いており、控えは短い。前面は平滑面を向けて据えられており、北側は石材が小さく、南側の角では大きめの石材が見られるなど違いが見られる。

SV2(図2・5)

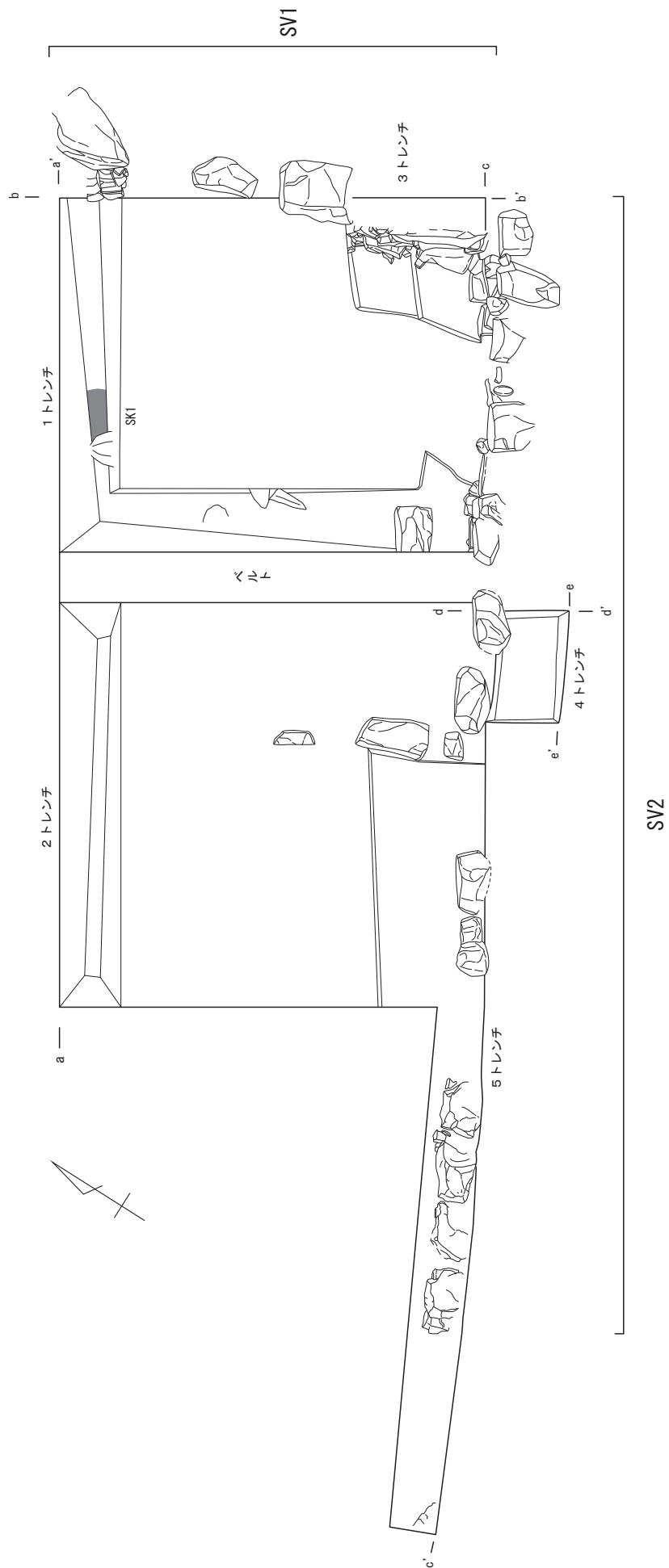
SV2は、SV1から続く東西約15mを測る石垣である。曲輪の内側に面を持ち、主郭の南東面虎口石垣と対応する。東側では4段が残るが、西側では1～2石程度しか残存していない。また、西側では整地層が見られず、20～22層のように斜めに堆積し、しまりがあまり強くない土の上に造られている。石材はチャートと凝灰質砂岩、変成岩が用いられているものの、SV1よりやや小ぶりである。背面を断ち割った4 トレンチでは、0.1～0.2m大の裏込石が土の層と交互に造成されることが確認できた(図6・7)。

遺物(図8)

Ⅰ区では853点の遺物が出土したが、破片が多いため、10点を図化した。1は中国産の青花皿である。外面高台脇に三重の界線、見込みは二重の界線の内側に花紋が描かれている。2は大窯第1段階の播鉢で、口縁外側に縁帯が形成される播鉢Ⅰ類にあたる。3は天目茶碗で、体部に丸みを帯びる。5は桶である。体部には刻み目が施され、大窯第4段階と考えられる。その他、図化はできなかったが、祖母懐壺・はさみ皿等が出土している。

瓦は826点が出土し、軒丸瓦3点、軒平瓦3点、丸瓦76点、平瓦735点、不明9点である。7は軒平瓦で、中心飾りは不明であるが2反転唐草紋と思われる。8の軒丸瓦は巴紋であり、9は平瓦で長さは32.2cm、幅は21.6cmである。凹面にナデ痕がみられる。

10は銭貨で、幕末に鑄造された「文久永宝」である。



0 S=1:60 1m

図 2 1 区 平面図

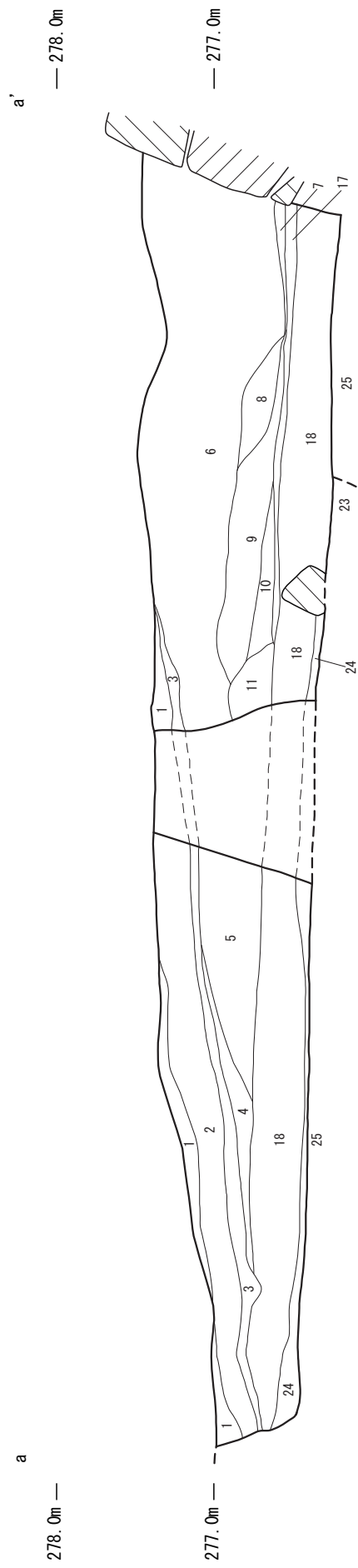


图3 a-a' 土层图

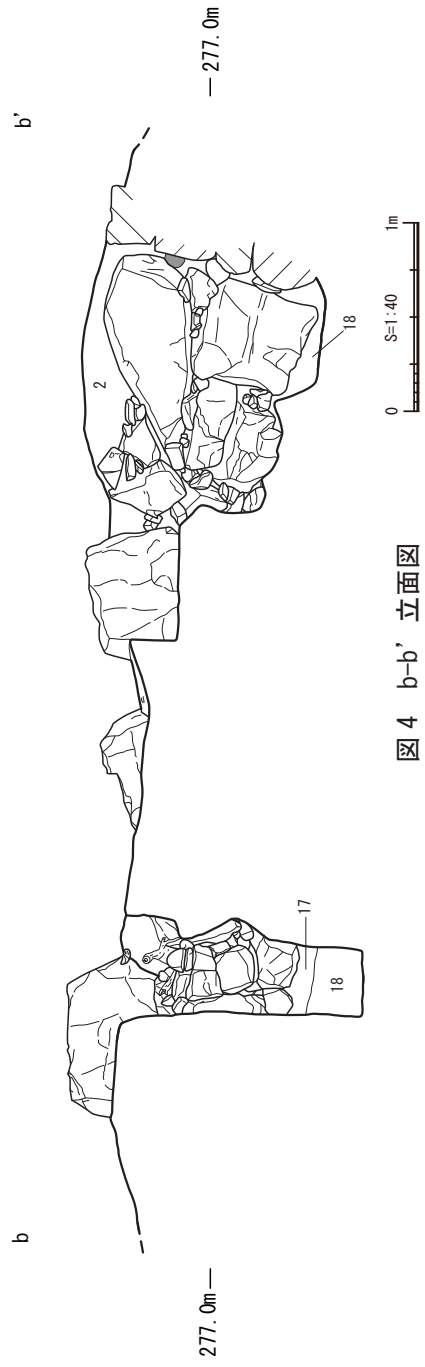


图4 b-b' 立面图

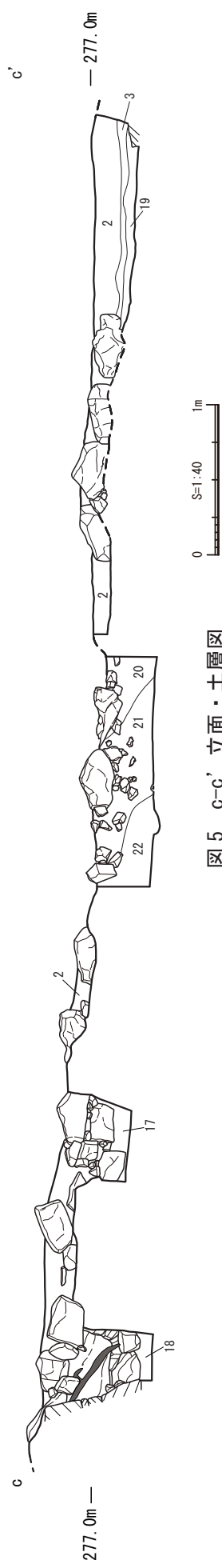


図5 c-c' 立面・土層図



図6 d-d' 土層図

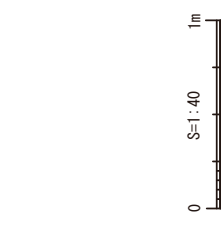
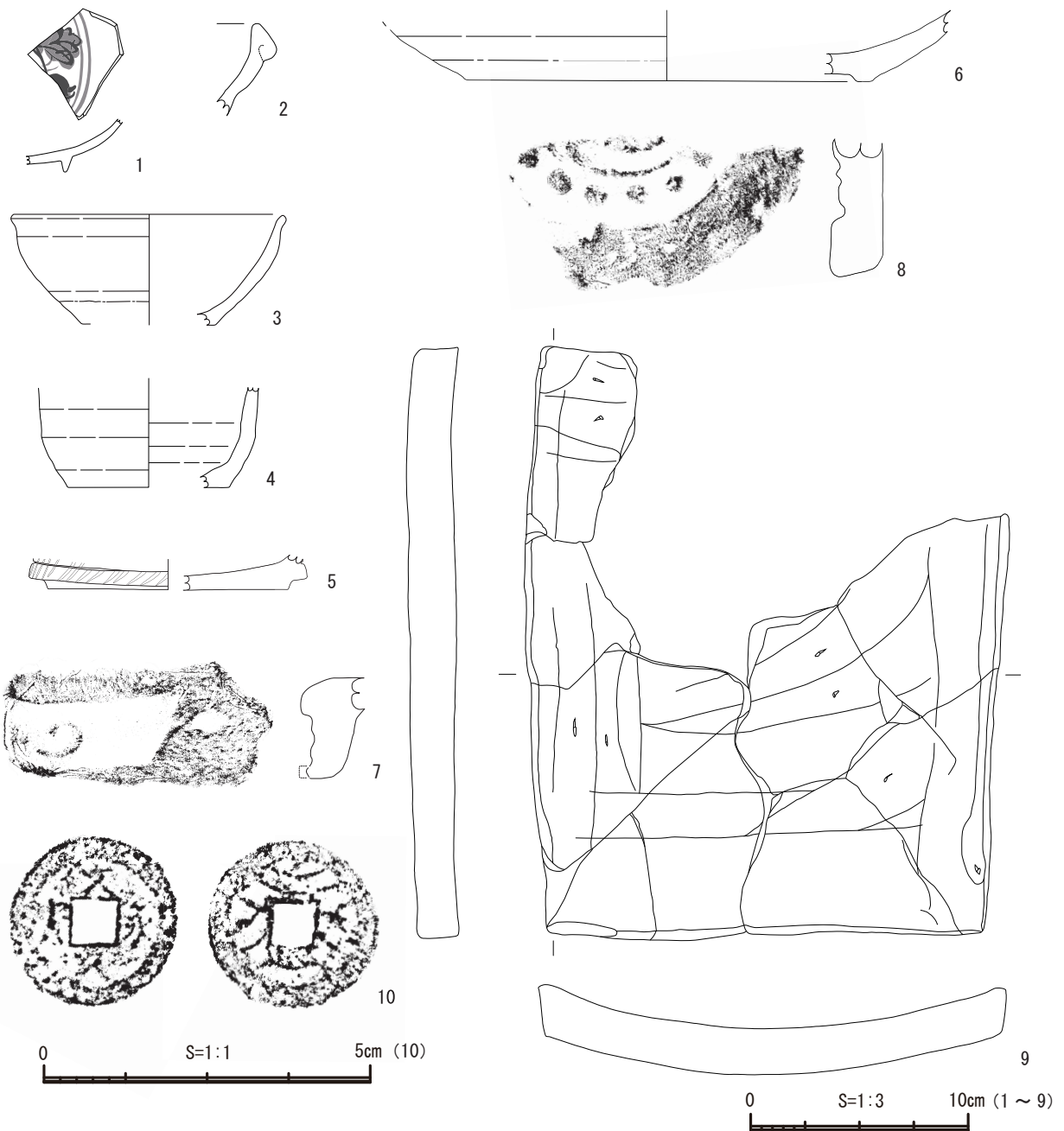


図7 e-e' 土層図

- 1 淡黄褐色土 しまり弱い 粘性弱い〔後世の造成土〕
- 2 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性弱い〔後世の造成土〕
- 3 褐灰色土 しまり弱い 粘性弱い〔旧表土〕
- 4 灰白色土 しまり弱い 粘性弱い〔堆積土〕
- 5 明黄褐色土 しまり弱い 粘性弱い〔堆積土〕
- 6 礫層 (2~15cmの礫を多く含む)〔堆積土〕
- 7 橙色土 しまりやや弱い 粘性弱い〔堆積土〕
- 8 明赤褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い〔堆積土〕
- 9 黄褐色土 (白色ブロック土混じる) しまり強い 粘性強い〔堆積土〕
- 10 赤色土 しまり弱い 粘性弱い〔堆積土〕
- 11 暗赤褐色土 しまり弱い 粘性弱い〔堆積土〕
- 12 明褐色土 しまり強い 粘性弱い〔裏込土〕
- 13 暗褐色土 (12と同じだが根腐乱を受ける) しまり弱い 粘性やや弱い〔裏込土〕

- 14 にぶい赤褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い〔裏込土〕
- 15 明褐色土 しまりやや強い 粘性強い〔裏込土〕
- 16 にぶい赤褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い〔裏込土〕
- 17 灰白色粘質土 (赤褐色土混じる) しまり強い 粘性強い〔石垣造成土〕
- 18 暗赤褐色土 (2~20cmの礫混じる) しまり弱い 粘性弱い〔石垣造成土〕
- 19 褐色土 しまりやや弱い 粘性やや強い〔石垣造成土〕
- 20 明褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い〔石垣造成土〕
- 21 橙色土 しまりやや弱い 粘性弱い〔石垣造成土〕
- 22 明黄褐色土 しまりやや弱い 粘性弱い〔石垣造成土〕
- 23 黒色土 しまり弱い 粘性弱い〔SK1の埋土〕
- 24 赤褐色粘質土 しまり強い 粘性強い〔地山風化層〕
- 25 地山



図版	種別	器種	出土位置	時期・分類	法量 (○)は現存、(□)は復元を示す。				軸葉	備考
					口径	器高	底・台径	その他		
1	青花	端反皿か	石垣掘え付け面覆土	16C	—	(2.3)	—	—	透明釉	釉のカキオトン
2	瀬戸美濃	摺鉢	石垣掘え付け面覆土	大1	—	—	—	—	錆釉	
3	瀬戸美濃	天目茶碗	旧表土	大3後	[12.5]	(5.1)	—	—	鉄、錆釉	
4	瀬戸美濃	德利	石垣掘え付け面覆土	大4	—	(4.5)	[7.4]	—	灰釉	
5	瀬戸美濃	桶	後世の造成土	大4	—	(1.4)	11.0	—	錆釉	
6	瀬戸美濃	大皿	後世の造成土	大4	—	—	[18.6]	—	錆釉	削り込み高台

図版	種別	器種	出土位置	弧深	文様区幅 (縦)	外区幅 (上)	外区幅 (下)	脇区幅	周縁高	頸下幅	頸上幅	頸高	備考
7	瓦	軒平瓦	石垣掘え付け面覆土	—	2.6	0.8	0.5	2.0	0.4	1.5	2.6	2.8	

図版	種別	器種	出土位置	直径	文様区幅	内区径	外区径	珠数	珠径	周縁幅	周縁高	厚さ	備考
8	瓦	軒丸瓦	石垣掘え付け面覆土	[15.4]	[8.4]	[6.8]	[4.4]	(6)	0.8	2.8	0.8	2.8	

図版	種別	器種	出土位置	コビキ	長さ	幅	厚さ	谷深	備考
9	瓦	平瓦	旧表土	—	32.2	21.6	2.1	2.1	

図版	種別	器種	出土位置	時期・分類	法量 (○)は現存、(□)は復元を示す。				軸葉	備考
					口径	器高	底・台径	その他		
10	銅製品	銭貨	後世の造成土	19c中頃	—	—	—	直径2.6		文久永宝

図8 I区出土遺物

第2節 II区 (図9～14)

II区は、概ね平坦であるが、後世の建物跡地から主郭中心部方面に向かうに従って緩やかに傾斜している。遺構面からの堆積土の厚さは南側で0.4m程度、北側で0.6m程度である。

II区北側部分、SX1と北面石垣の間にはチャートが主体となる礫層が見られ、礫の中からは瓦や貝類遺体が出土している。これらの石は主郭の北面石垣の裏込石が残存している可能性も考えられる。主郭の北側は造成を行っていることが確認された。

SX1、SX2、SK2が見られる面には、SV3が築かれる。また、これより5cm程度の整地層の上には礎石が2つ見られ、直上でかわらけや瓦等が出土している。上と下の遺構面は、遺物からの時期差は不明であるが、二時期の遺構面が確認される。これにより南側の敷石遺構であるSX2の上にある17層は、遺構面を削った破城に伴う堆積である可能性と上面遺構に伴う一連の造成土である可能性の二つが考えられる。

SX1

直径0.1～0.2m程度の川原石を中心に用いた敷石である。南北約1.5m×東西約2.5mの緩斜面に貼られ、部分的に0.8m程度の比較的大型の石材が見られる。南側の敷石遺構(SX2)に比べて川原石は割石が多く、積み重なるように広がっており、用途は不明であるものの、庭園・通路等の可能性が想定される。

SX2

直径0.1～0.2m程度の川原石を用いた敷石を検出した。南北約2m×東西約2mの範囲で分布している。石材が集中している部分と点在している部分が見られ、西端では5つの川原石を直線的に並べている。北側の敷石遺構(SX1)に比べて割石は少なく、石同士の重なりも少なく平面的に広がっている。川原石直上でかわらけや天目茶碗等が出土している。天守推定地と御殿推定地の間に位置し、通路等の可能性が推測されるものの用途は不明である。

SK2

南北0.6m×東西0.5m、深さ約0.3mのやや楕円形を呈する土坑である。古城山の自然岩盤を掘削している。埋土は暗褐色土で、埋土からかわらけが出土している。

SV3

階段状に並び、西側で岩盤に連続する全長約4.7mの石列である。東端から約0.6mの地点で南側に、約2.5mの地点で西側に、約1mの地点で南側に折れる。現存高0.3m程度で、主にチャートが用いられ、一部凝灰質砂岩を含んでいる。石材は0.2～0.8m程度と大きさは不規則であるが、比較的大きめな横長の石材を用いる。平滑面を前面と上面に向けて据えており、面をそろえようとする意図が見受けられる。背面を断ち割ったAトレンチ内では、0.1～0.2m大の裏込石が土の層と交互に造成されている。(図13)

SB1

II区内において2個の礎石を検出した。この礎石はSX2より5cm程度岩盤に盛土をした層に据えられる(図14)。礎石は直径約0.3mの川原石であり、東西方向に並び、標高が約276.7mでは

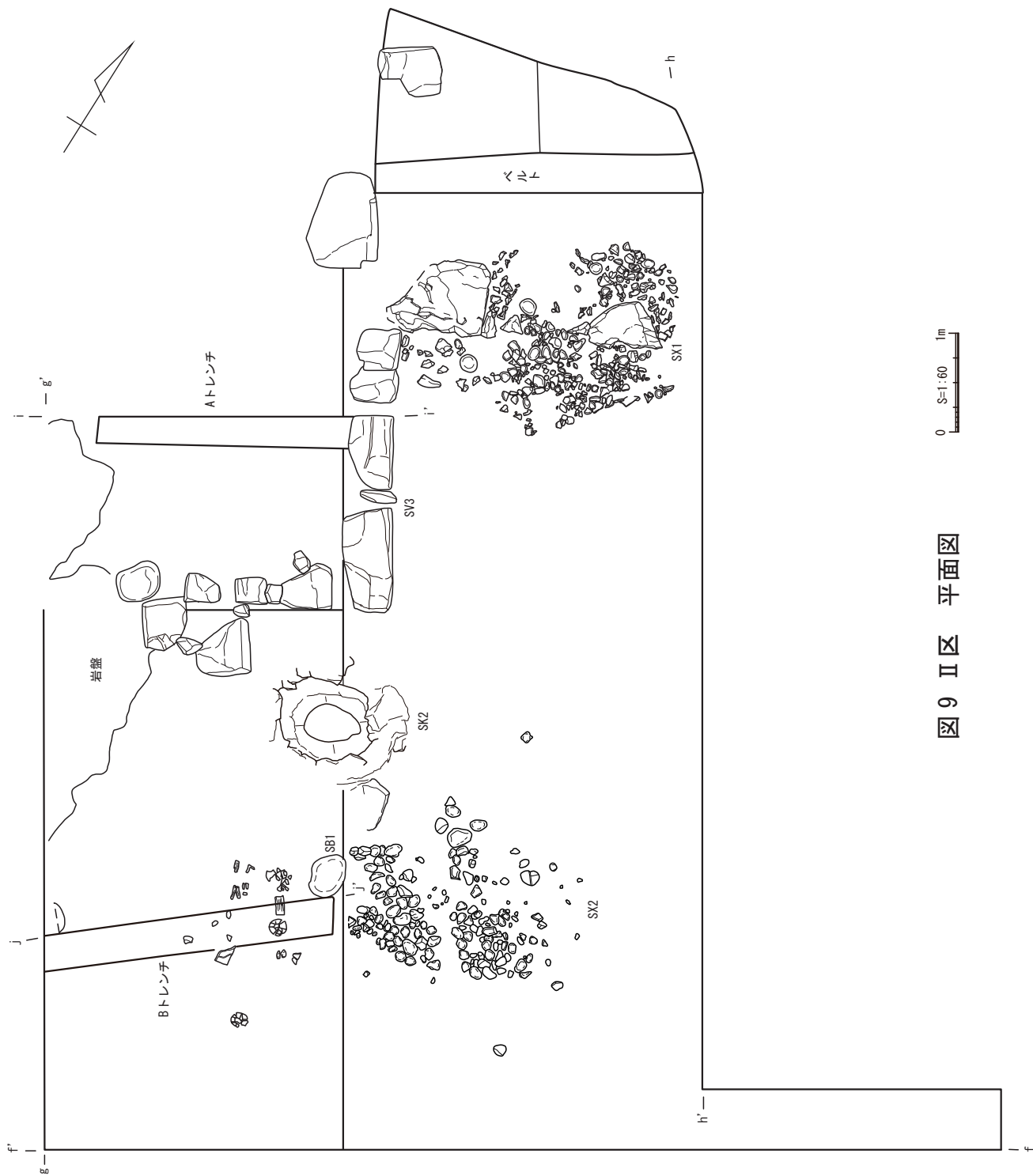


図9 II区 平面図

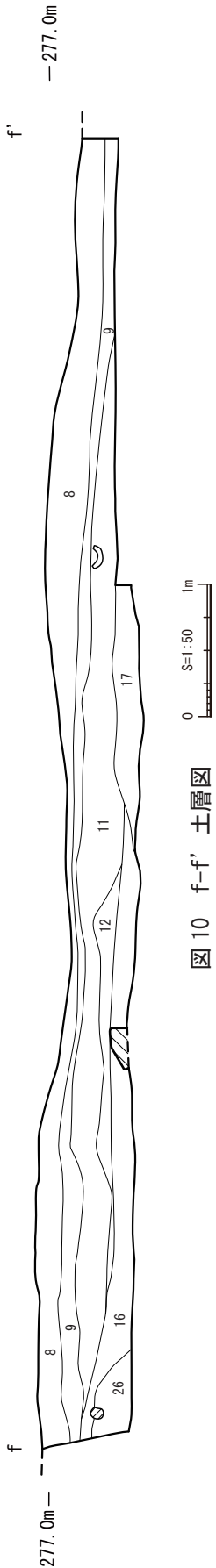


図 10 f-f' 土層図

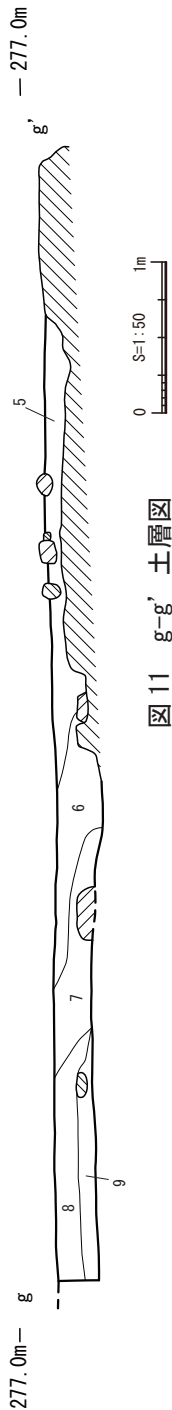


図 11 g-g' 土層図

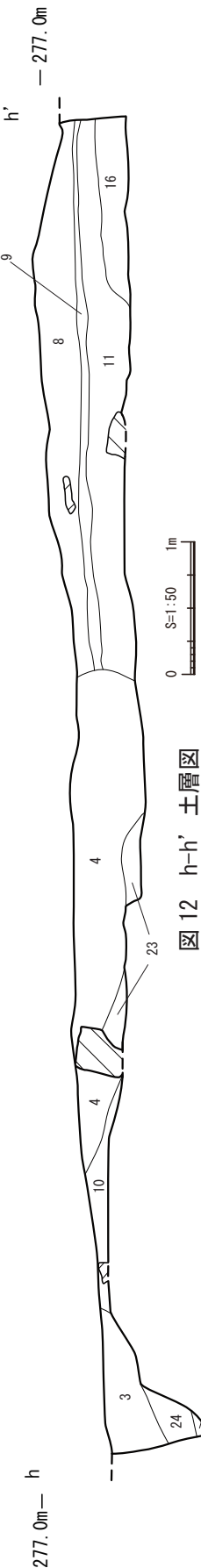


図 12 h-h' 土層図

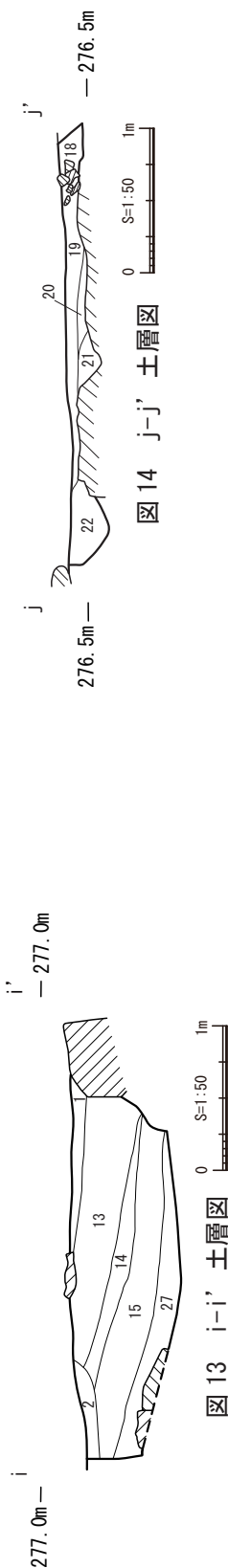


図 13 i-i' 土層図

- 1 明黄褐色土 しまりあり 粘性弱い〔表土〕
- 2 明褐色土 しまりあり 粘性あり〔現代の遺物含む攪乱〕
- 3 黒褐色土 しまり弱い 粘性弱い〔近代以降の攪乱〕
- 4 暗褐色土 しまりやや強い 粘性強い〔近代以降の攪乱〕
- 5 褐色土 しまりあり 粘性あり〔後世の造成土、現代の遺物を含む〕
- 6 灰黄褐色土 しまりあり 粘性あり〔後世の造成土〕
- 7 にぶい褐色土 しまりあり 粘性あり〔後世の造成土〕
- 8 にぶい黄褐色土 しまり弱い 粘性弱い〔後世の造成土〕
- 9 褐色土 しまり弱い 粘性弱い〔旧素土〕

- 10 にぶい橙褐色土 しまり弱い 粘性強い〔旧素土〕
- 11 黄褐色土 しまり強い 粘性強い〔堆積土〕
- 12 黄褐色土 しまりやや強い 粘性やや強い〔堆積土〕
- 13 明褐色土 しまり弱い 粘性弱い〔裏込土〕
- 14 黄褐色土 しまり強い 粘性弱い〔裏込を二段階に入れた途中の整地土か〕
- 15 明褐色土 しまり弱い 粘性弱い〔裏込土〕
- 16 暗褐色土 しまり弱い 粘性弱い〔石埋造成土〕
- 17 にぶい黄褐色土 しまり強い 粘性強い〔礎石を据えるための整地土〕
- 18 明黄褐色土 しまりあり 粘性弱い〔礎石を据えるための整地土〕

- 19 褐色土 (炭を含む) しまり強い 粘性弱い〔整地土〕
- 20 橙褐色土 しまり強い 粘性弱い〔整地土〕
- 21 黄褐色土 しまり強い 粘性あり〔整地土〕
- 22 黄褐色土 しまり強い 粘性あり〔堆積土〕
- 23 明褐色土 しまり強い 粘性やや強い〔堆積土〕
- 24 暗褐色土 しまり弱い 粘性弱い〔円礫下部の充填土〕
- 25 暗褐色土 しまり弱い 粘性弱い〔円礫下部の充填土〕
- 26 赤褐色粘質土 しまり強い 粘性強い〔地山風化層〕
- 27 地山

図 14 j-j' 土層図

ば一定である。礎石の間隔は 2.3m (7 尺 6 寸) となっており、この面には他の礎石が見られないため規模は不明ながら、本丸の礎石建物との関連が推測される。

遺物 (図 11・12)

Ⅱ区では 319 点の遺物が出土し、大半は破片である。そのうち残りが良い 20 点図化した。

11・13 はロクロ成形のかわらけであり、底部に糸切り痕が残る。12 は非ロクロ成形のかわらけであり、見込みに圈線が巡る。全体の形状から京都産土師器皿を模倣した製品と考えられる。14 は 16 世紀後半の漳州窯の皿で、内面に捺花文様が描かれる。18 は折縁皿であり、大窯第 4 段階前半と想定される。19 は大窯第 3 段階の灯明皿で、底部に糸切り痕が見られる。20・21・22 は瀬戸美濃産の播鉢である。20 は口縁外側に縁帯が形成される播鉢Ⅰ類、21 は口縁の断面形が長方形に近く、大窯第 4 段階前半に属すると考えられる。27 は黄瀬戸の鉦鉢である。見込み部分には線刻で葉が描かれ、過去に採集されたものと接合できた。28 は建水であり、大窯第 4 段階と想定される。

瓦は 118 点出土している。29 の平瓦で、長さは 27.5cm、幅は 21.5cm であり、凹面にナデ痕が見られる。30 は道具瓦で、5 本纏りの刻み目がある。裏面の形状から雨蓋瓦の可能性はある。

第 3 節 表採遺物 (図 16)

調査区およびその付近から 26 点の遺物を表採し、その中で 4 点を図化した。31 は青磁碗であり、高台内面に白磁釉が施される。32 は折縁皿であり、口縁の形状から大窯第 4 段階前半である。33・34 は、天目茶碗である。34 は口縁が玉縁状を呈し、大窯第 4 段階前半にあたる。

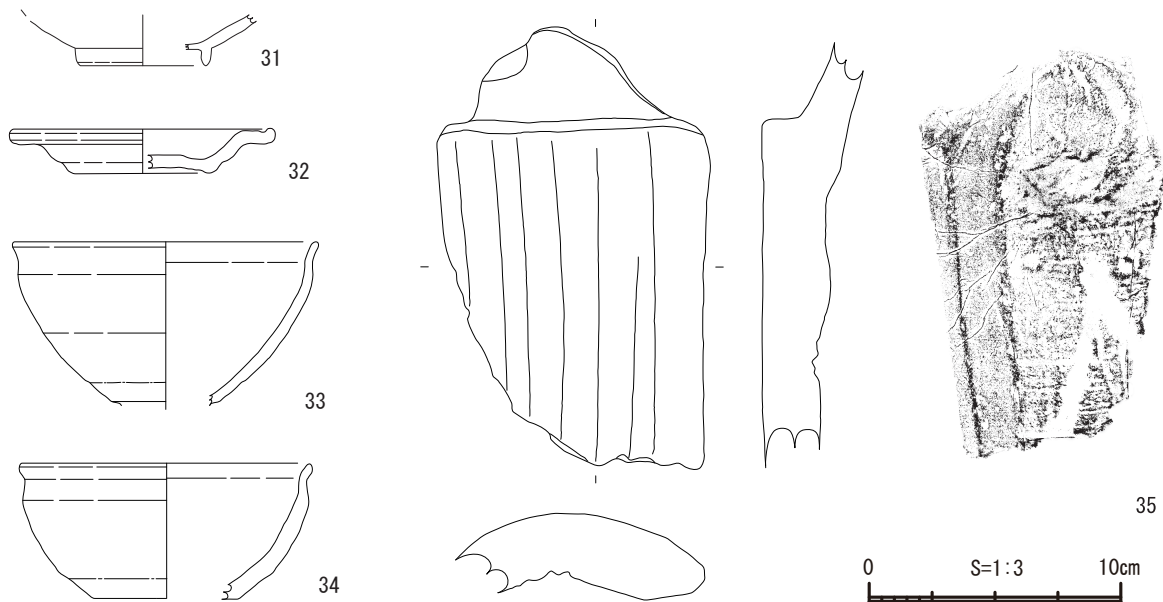
瓦は丸瓦 2 点、平瓦 3 点の 5 点が出土している。35 は丸瓦であり、凹面に釣り紐痕が見られる。

(河本)

図版	種別	器種	出土位置	時期・分類	法量 ()は現存、[]は復元を示す。				軸葉	備考
					口径	器高	底・台径	その他		
11	土師器	皿	Ⅱ区堆積土		9.8	3.3	4.0			底部糸キリ、ロク口調整
12	土師器	皿	Ⅱ区上面遺構造成土直上		12.1	2.1	6.6			非ロク口調整、モクメ調整か
13	土師器	皿	Ⅱ区上面遺構造成土直上		11.7	3.0	5.0			底部糸キリ、ロク口調整
14	青花	皿	攪乱層	16c後半	[11.3]	2.7	[5.8]		透明釉	高台内をケズリ 漳州窯産
15	備前	德利	攪乱層		—	(5.5)	—	胴部[8.4]		
16	瀬戸美濃	丸皿	攪乱層	大4後	[9.5]	1.7	[5.7]		灰釉	底部糸キリ トチン痕
17	瀬戸美濃	丸皿	Ⅱ区堆積土	大3後	[9.4]	1.6	[5.2]		灰釉	削り込み高台
18	瀬戸美濃	折縁皿	Ⅱ区堆積土	大4前	[11.2]	(1.8)	—		灰釉	
19	瀬戸美濃	皿	Ⅱ区堆積土	大3	[9.8]	2.2	[5.0]			底部糸キリ 灯明皿使用
20	瀬戸美濃	掃鉢	Ⅱ区堆積土	大2	—	(13.3)	—		錆釉	
21	瀬戸美濃	掃鉢	攪乱層	大4前	—	(2.5)	—		錆釉	
22	瀬戸美濃	掃鉢	攪乱層	大4	—	(4.5)	[11.0]		錆釉	底部糸キリ
23	瀬戸美濃	向付	Ⅱ区堆積土	大4	—	(0.8)	[6.2]		灰釉	付高台
24	瀬戸美濃	匣鉢	Ⅱ区堆積土	大窯	—	(6.0)	—			
25	瀬戸美濃	德利	Ⅱ区堆積土	大4	—	(6.5)	—	胴部[11.4]	灰釉	
26	瀬戸美濃	祖母饅壺	Ⅱ区堆積土	大窯	—	(7.1)	7.0			底部へラ起こしか
27	瀬戸美濃	缸鉢	攪乱層		—	—	[22.4]		灰釉	
28	瀬戸美濃	建水	後世の造成土	大4	[14.5]	14.5	[14.4]			底部糸切痕

図版	種別	器種	出土位置	コピキ	長さ	幅	厚さ	谷深	備考
29	瓦	平瓦	Ⅱ区上面遺構造成土	—	27.5	21.5	1.9	2.1	
30	瓦	道具瓦	Ⅱ区上面遺構造成土	—	(11.1) × (12.9) × 6.3				

表2 Ⅱ区出土遺物観察表



図版	種別	器種	出土位置	時期・分類	法量 ()は現存、[]は復元を示す。				軸葉	備考
					口径	器高	底・台径	その他		
31	磁器	碗	表探		—	(2.0)	[5.0]		青磁釉	高台内面に白磁釉施釉
32	瀬戸美濃	折縁皿	表探	大4	[10.3]	1.6	[5.2]		灰釉	削り込み高台、輪トチン痕
33	瀬戸美濃	天目茶碗	表探	古瀬戸Ⅳ新	[12.2]	(6.5)	—	胴部(11.4)	鉄、錆釉	
34	瀬戸美濃	天目茶碗	表探	大4	[11.4]	5.4	—		鉄釉	

図版	種別	器種	出土位置	筒部長	玉縁長	筒部幅	高さ	備考
35	瓦	丸瓦	表探	(13.7)	(3.2)	(9.8)		

図16 表探遺物

第4章 まとめ

第1節 遺物について

出土した陶器は、瀬戸美濃産の製品が主体である。器種ごとの傾向としては、瀬戸美濃産の播鉢、天目茶碗、黄瀬戸の鉢や向付などが多く出土している。平成18年度に行われた御殿があったと想定されている主郭部分の調査では、瀬戸美濃産の皿類、鉢類、碗類の順で多く出土していることが明らかとなっており、天守台と御殿では出土遺物の傾向が異なることが分かる。また、匣鉢が出土していることから、美濃の窯場との関連性も伺われる。

かわらけは、Ⅰ区に比べてⅡ区での出土が多い。平成18年度の主郭部分の調査においてもⅡ区北側付近でかわらけが多く出土していることから、建物外への廃棄が想定される。また、今回出土したかわらけの約8割がロクロ成形のものである。主郭部分で出土したかわらけは非ロクロ成形のものが多く、ロクロ成形と非ロクロ成形で場所による使い分けがあった可能性がある。なお、非ロクロ成形のかわらけの中には京都産土師器皿を模倣したと考えられる製品も含まれている。今後は、美濃金山城跡出土のかわらけの様相について、詳細に検討することが求められるだろう。

瓦は出土点数の9割程度が平瓦であり、軒丸・軒平瓦は11点ほどである。出土した瓦のうち、約8割が天守と想定されるⅠ区から出土している。

第2節 遺構と年代観について

今回の調査において報告の通り、Ⅰ区とⅡ区でそれぞれの調査区の役割を特徴付ける遺構が検出された。1・2トレンチの層序は上から礫層（上）、しまりの強い盛土、整地層、礫層（下）、掘り込みが見られる地山面となり、下記の三つの時期が想定される。

第1期 掘り込みの見られる地山面

第2期 礫層（下）の上に整地層があり、石垣が築かれた時期（上部に瓦葺建物か。この整地層より上層では瓦が見られるが、下層ではアカニシ貝と磁器のみであり瓦は確認されていない。）

第3期 礫層（上）面（改変が入っているが、丸岡城、松阪城天守台に見られる内向きの石垣の中に内部に礫を補充して天守を造営した可能性や半地下構造の天守を改修した痕跡とも考えられる。）

この三つの時期の中で第2期は石垣が築かれることや整理面より上からのみ瓦が出土することからも豊臣期森段階であろう。ただ、調査面積が狭小なことも考えられるが、第2期の整地面や第3期の礫層では礎石が検出されていないため、更なる検討は必要となる。

Ⅰ区ではL字状の石垣が検出され、曲輪の内側に面を持ち、主郭を構成する石垣に対応することから、半地下式構造の天守に相当する高層建築物が存在した可能性が指摘できる。主郭東側虎口内には、今回見つかった石垣に対応するように礎石が外側の石垣直下に配置されている。このことから天守は天守台から張り出す形で存在した可能性もあろう。また、調査区外ではあるが、主郭北西虎口の石垣は天守部分の造成後に増築された可能性が高い。おそらく虎口の防御強化のためであろう。また、この改築に伴って天守が増築された可能性もある。

Ⅱ区では南北で二つの敷石遺構が検出された。これまでの調査においても、虎口などの通路部において川原石を敷き詰めた敷石遺構が確認されている。特に、南側の敷石遺構（SX2）は川原石を均しく敷いており、遺構直上で遺物が検出されることから、通路であった可能性がある。一方、北側

の敷石遺構(SX1)は、庭園推定地に隣接していること、御殿側に傾斜して敷かれていることなどから通路の可能性のほかに、庭園の一部であった可能性も考えられる。

以上のことから、Ⅰ区では天守に相当する建物を中心とした本丸最奥部の象徴的空間、Ⅱ区は御殿を中心とした居住空間であると考えられ、Ⅰ区とⅡ区ではその用途に大きな差があったことが判明した。天守の改築等の時期も含め、検出された遺構面との関連性は今後の課題となる。

(河本)

第3節 まとめ

今回の調査は美濃金山城跡の主郭(本丸)東端の遺構を分析する目的で実施したものである。調査地の南側には枡形虎口が開口しているが、その北壁石垣直下に礎石列が確認されており単純な枡形虎口ではないと考えられており、あるいは天守台の穴蔵ではないかとも考えられていた。ただ調査地には建物が鎮座しており、その実態については不明であった。

今後の史跡整備に調査地は非常に重要な場所であり、今回そのための確認調査が実施できた意義は大きい。

さて、ここでは検出された遺構について若干の考察を加えてまとめとしたい。まず当該地が本丸の東端に位置していることより天守の建てられていた可能性が高いところである。ただ、天守の土台となる天守台は存在しない。今回の調査で最も注目されるのは本丸東端石垣と南端石垣に平行して城内側に面を揃えて検出された石垣 SV1 と、SV2 であろう。検出当初は天守穴蔵の内側石垣と考えられたのであるが、その深さは残存高 1m であり、天端が崩されているとしてもその高さが 1.5m を超えるものではなく、穴蔵とは考えられない。

ただ昭和 17 年に解体修理が施されたものの昭和 23 年に福井地震で倒壊した丸岡城(福井県坂井市)天守では、解体修理工事の写真をみると天守台石垣の内側に並行する石列が認められ、修理工事報告では石列の深さが 2 尺ばかりと記されている。丸岡城天守は掘立柱建物という極めて特異な構造であるとされているが、実は造営当初は約 60cm の床下が存在していたようで、柱も掘立柱ではなく床下に礎石立ちであったものが、その後床下が埋められた結果と考えられる。

さらに鎌刃城跡(滋賀県米原市)では天守ではないが、城の北端に位置する櫓と考えられる建物が半地下構造であったことが判明している。小曲輪の土塁と思われていた内部の調査で 5 間以上×5 間以上の総柱建物の礎石が検出されたのであるが、土塁直下で礎石が検出されており、その建物構造が半地下構造であったことが明らかとなっている。ここでは残存する土塁天端から礎石検出面までは約 1.5m あり、金山城の遺構に近い。

このように金山城の SV1、SV2 は主郭東端建物の半地下施設を形成する石垣であったことはまちがいない。さらに穴蔵としては低すぎ、通常の穴蔵構造ではなかったと考えられる。

なお、今回の調査によっていくつかの課題も残された。建物を天守相当の建物と考えると、半地下構造であった段階での礎石、あるいは柱穴が検出されておらず、建物構造は把握できなかったこと。また、主郭東側、北側、南側石垣が土台石垣となるが、西側では石垣が存在せず、主郭との接続構造が不明であること。さらに、枡形虎口の礎石列との関係も明らかにすることができなかったことなどである。

こうした課題を念頭において来年度の発掘調査に臨みたい。

(中井)

<参考文献>

愛知県史編さん委員会編 2007『愛知県史 別編窯業2 中世・近世 瀬戸系』

井川祥子 1997「15世紀後半から16世紀前葉の土師器皿の様相—中濃地域を中心として—」

『美濃の考古学 第2号』美濃の考古学刊行会

井川祥子 2006「美濃中世後期土師器皿の分類と編年」『守護と戦国城下町』高志書院

奥本英里 2016「松坂城跡本丸石垣の発掘調査」『織豊城郭 第16号 構築技術からみた織豊系城郭の石垣の成立』
織豊期城郭研究会

可児市教育委員会 2013『金山城跡発掘調査報告書』

付論 第6次調査出土貝類遺体について

織豊系城郭として知られる美濃金山城跡は、岐阜県可児市に存在し、国指定史跡となっている。本城跡主郭の第6次発掘調査において、少量ではあるが貝類遺体が発掘された。中近世の城跡の調査により、大量ではないが貝類遺体の確認される例は稀ではない。しかし、その多くは、溝や廃棄土坑等からのものであり、今回の美濃金山城跡では本丸の、しかも天守の可能性もある地点からの出土遺体であり、極めて興味深いものと考えられる。

ここに得られた貝類遺体を報告し、併せてその由来に関しても若干の想定を記させて頂いた。

出土地点と年代

貝類遺体は主郭の2つのトレンチから得られた。1トレンチの資料は天守の存在していた可能性の考えられている部分の地山を掘り込んだ1次整地面の礫層から、Ⅱ区出土個体は北側部分の平坦面を造成したと思われる礫層中から、それぞれ出土していた。

考古代は、両方とも16世紀中葉から16世紀末とされる。

貝類遺体の記載

アカニシ *Rapana venosa* (図17-1, 2)

アッキガイ科に属する大形巻貝。1トレンチから殻頂部と背面部の欠落した個体(図17-1)が、3トレンチからは軸柱部と縦張肋的な破片(図17-2)が得られている。1トレンチの個体は、推定殻高12cm、軸柱部幅22.1mmと、比較的大形のものであった。Ⅱ区の軸柱部はかなり溶けていたが、その幅は18.5mmで、1トレンチの個体とおおよそ同サイズと考えられた。アカニシは明瞭な縦張肋を持たないが、縦張肋的な肥厚部は存在する。縦張肋的な破片はボウシュウボラの可能性も想定されたので、現生標本と比較を行った。その結果、ボウシュウボラでは縦張肋は明瞭に形成され、また他の部分には疣状の結節が認められたことから、この破片もボウシュウボラではなく、アカニシだと判断した。

アカニシは主に内湾の潮間帯下部から潮下帯の砂泥底に生息する。これまでの筆者の定性的な観察では、今回のような比較的大形のアカニシを潮間帯で見ることはなかったので、何らかの漁具(底曳網・刺網等)により潮下帯から得られた個体と思われる。ただ、現在とは異なり、捕獲圧が低かった場合には、時には今回程度の大形個体も潮間帯に低密度で生息していた可能性も残る。

サザエ *Turbo (Batillus) "sazae"* (図17-3)

リュウテン(サザエ)科の大形巻貝。Ⅱ区から内唇部2片と螺層部1片が確認できた。殻のサイズ・真珠光沢を有する内唇とその形状・螺肋の明瞭な破片から本種と同定した。サザエは周知の通り、外海岩礁の潮下帯に生息する種である。

ハマグリ? *Meretrix lusoria?* (図17-4)

マルスタレガイ科の大形二枚貝。Ⅱ区から、溶けてはいるものの、表面は平滑と考えられ、やや膨らみは弱く、鉸歯部分は消失しているもののハマグリと同様な右殻殻頂部片も含まれており、ハマグリと考えられた。ただ、チョウセンハマグリ等の可能性も否定できないので、?を付した。図示したものよりも小さな破片も2片含まれていた。ハマグリは内湾の潮間帯から潮下帯の砂泥底に

生息する種である。

貝類遺体の由来と意義

今回同定できた3種は、現在も食用とされる種であり、中近世でも各地で常に出土する種である(樋泉 2014; 池田・丸山 2014)。そのため、当然、食用として、持ち込まれたものと考えられる。特に、Ⅱ区は造成時と考えられる礫層から出土しており、周囲に廃棄されていたものが包含されたと考えられる。Ⅱ区が天守の想定位置の外側にあることも、この想定と矛盾しない。ただ、アサリやシジミのように汁等で一度に多く利用される普通の種がみられなかったこと、伊勢湾には生息しないサザエが含まれていたことから、溶けてしまった殻も多いと考えられるものの、この地点ではランクの高い貝類を非日常に食用としていた可能性も想定されよう。

一方、1トレンチは天守の存在も考えられている地点の地山直上の礫層中から1個体のみ確認されている(本報告書図3の18層中)。そして、図17-1のように、溶けているものの、Ⅱ区よりも多く残存している。近世の大坂城の堀等から出土した貝類遺体を詳細に検討した池田(2006)は、破損が3/4のアカニシで認められ、その破損は定式化しており、主に食用のためであることを示した。特に、殻口側の破損率が高いという結果となっている。今回の1トレンチの資料は溶けており、正確には人為的な破損を検証できないが、殻口部は残存している。そのため、本資料は破損のない完形であった可能性も想定できる。

そして、姫路城の昭和の大修理に伴う調査でも、アカニシが単独で、食用廃棄とは考えられない状況での出土が記録されている(文化財保護委員会 1965)。今回の美濃金山城跡の出土地点・出土状況も姫路城の例と同様と考えられるのではないだろうか。筆者は正確な報告を確認できなかったが、出土状況の類例も知られているようである^註。

もし、これらの例が食用廃棄由来ではないとするならば、近世の築城に伴い少数のアカニシを整地層等に置くという行為が広く存在したことになる。このことは、今後の城跡発掘調査の折に、たとえ破片であっても貝殻片が確認されれば、考古学的な取上げを行い、専門家に同定してもらうことによって検証可能と考えられる。現時点では、このような出土状況はアカニシの例のみであり、この種のみが選択されていたのか、もしそうであるならばその意図はどのようなものであるのか、ということ等も今後の課題であろう。そして、貝類と共伴する少数の遺物との関係を把握することなどで、興味深い結果が引き出される可能性も想定される。

城跡等の発掘調査で貝殻片が認められた場合、“単なる食糧残滓の混入”との先入観を持たずに取り上げられることを願いたい。

(黒住耐二)

註

千葉県北部の中世期では、地下式土坑に大量の淡水二枚貝のイシガイ科貝類(厚質イシガイ類:イシガイ・マツカサガイ類)が廃棄されており、海産貝類はごく少数ながら、少数のアカニシの伴う例が知られている。アカニシの軸柱部だけの場合も認められ、食用以外の意図でアカニシが置かれた可能性も想定されている(西野 2010; 黒住 2017)。城跡の整地層とは全く異なるが、食用以外の意図でのアカニシ利用と捉えられるならば、興味深い類似とも考えられよう。

引用文献

池田 研. 2006. 大坂城跡 (03-1・OKS99) 出土の貝類. 大坂城址Ⅲ, 大阪府文化財センター調査報告書, (144): 543-553.

池田 研・丸山真史. 2014. 上方およびその周辺の水産資源. 季刊考古学, (128): 63-66.

黒住耐二. 2017. 須賀井遺跡から得られた貝類遺体. 須賀井遺跡, 縄文時代以降編, 千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告, (18): 102-109.

西野雅人. 2010. 貝類. 印旛村松虫陣屋跡, 千葉県教育振興財団調査報告書, (636): 123-124, pl. 40.

樋泉岳二. 2014. 鎌倉・江戸の水産資源. 季刊考古学, (128): 60-62.

文化財保護委員会. 1965. 国宝 重要文化財 姫路城保存修理工事報告書.



図17 出土貝類遺体

図版 1



調査区全景（西より）



調査区全景（東より）



I 区石垣検出状況（西より）



1トレンチ北面土層（南西より）



2トレンチ北面土層（南西より）



I区 SV1 検出状況(西より)



3トレンチ SV1・SV2 検出状況(南西より)



1トレンチ南側 SV2 検出状況(北より)



1トレンチ SK1 検出状況(北西より)



5トレンチ SV2 検出状況(北西より)



5トレンチ SV2 検出状況(北西より)



4トレンチ平面(西より)



4トレンチ東面土層(西より)

図版 3



Ⅱ区完掘状況（南西より）



Ⅱ区北側拡張区礫検出状況（西より）



Ⅱ区南面東側土層（北より）



Ⅱ区南面西側土層（北より）



Ⅱ区南面西側土層（北より）



II区東面土層（西より）



II区 SX1 検出状況（南より）



II区 SK2 完掘状況（南より）



II区 SX2 検出状況（東より）



II区 SV3 検出状況（南東より）

図版 5



SV3 裏込め状況（西より）



A トレンチ南面土層（北西より）



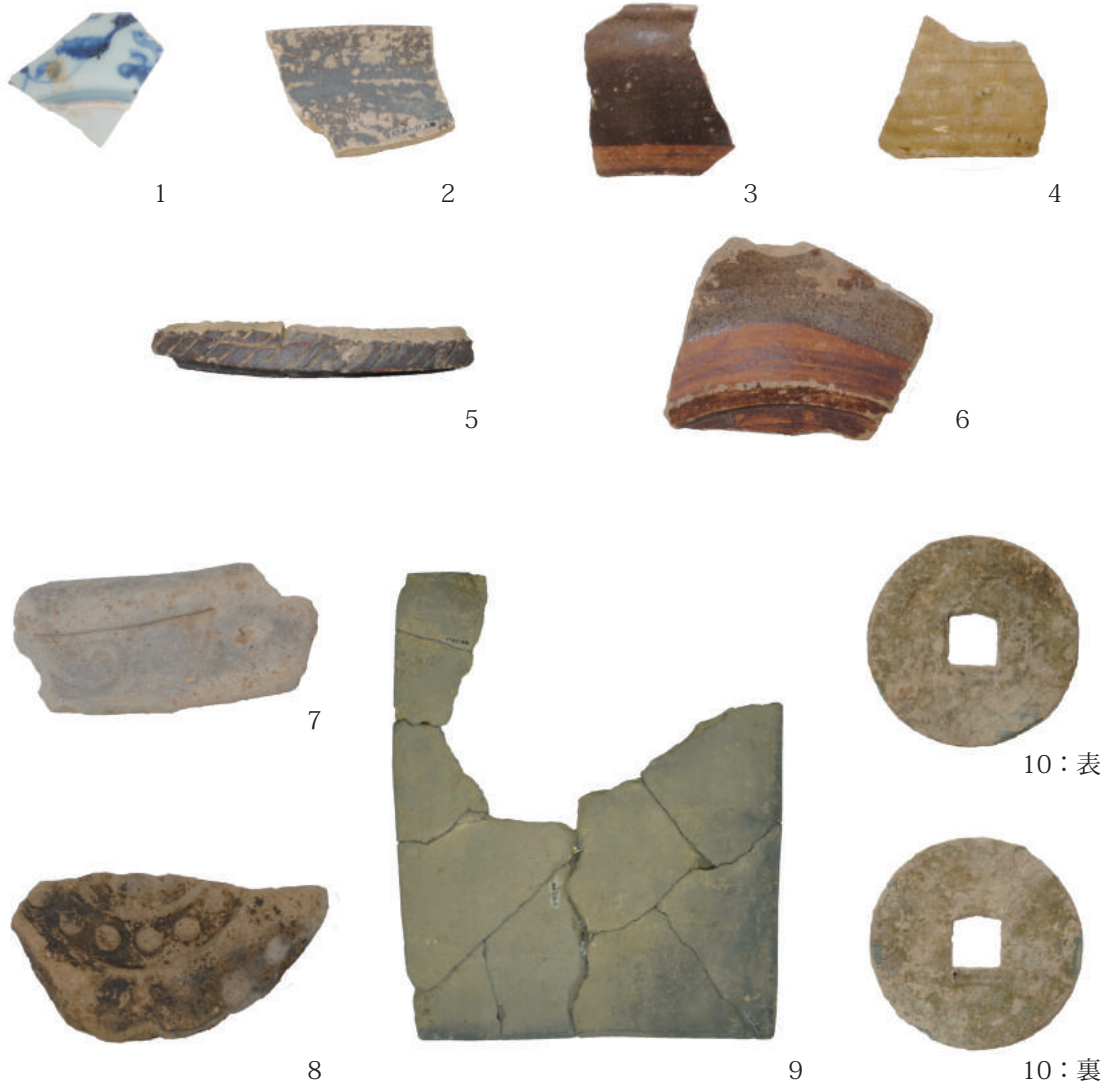
II 区遺物出土状況（西より）



B トレンチ北面土層（南より）



II 区北側拡張区東面土層（西より）

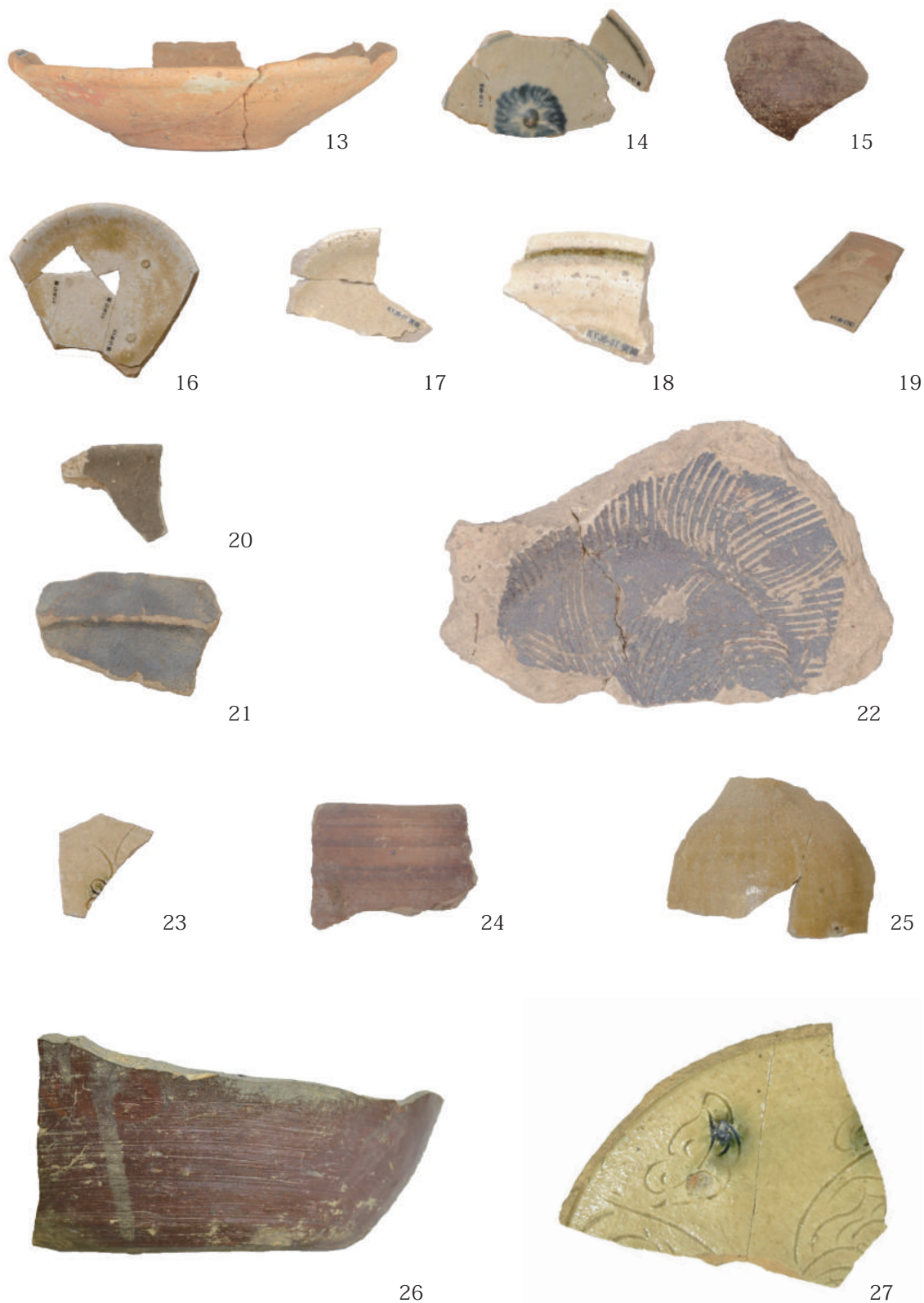


I 区出土遺物



II 区出土遺物 (その 1)

図版 7



Ⅱ区出土遺物（その2）



28

29

30：表

30：裏

Ⅱ区出土遺物（その3）



31

32

33

34

35

調査区周辺表採遺物

報告書抄録

ふりがな	くにしせきみのかねやまじょうあとはつくつちょうさがいほう いち						
書名	国史跡美濃金山城跡発掘調査概報 I						
副書名							
シリーズ名	可児市埋文調査報告						
シリーズ番号	52						
編集者名	長江真和 長沼毅 中井均 黒住耐二 河本愛輝 齊藤秀香 佐藤佑樹 柴田慎平						
編集機関	可児市教育委員会						
所在地	〒509-0292 岐阜県可児市広見一丁目1番地						
発行年月日	西暦 2018年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地名	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間 面積	調査原因
みの 美濃 かねやまじょうあ 金山城跡	ぎふけんかにしかねやま 岐阜県可児市兼山 1418-211	21214	4477	35° 27' 23"	137° 05' 49"	20170904～ 20171027 74 m ²	遺跡の 内容確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
美濃金山城跡	城館跡	戦国時代	石垣 礎石 石敷遺構	瀬戸美濃産陶器 かわらけ 磁器 瓦			

国史跡美濃金山城跡発掘調査概報 I

平成 30 年 3 月 30 日 印刷

平成 30 年 3 月 30 日 発行

編集・発行 可児市教育委員会

〒509-0292 岐阜県可児市広見一丁目1番地

TEL 0574-62-1111 Fax 0574-63-6751

印刷 有限会社 ヤマモト印刷